

アイデアコンペの中から提案 (その1)

創刊号(平成24年9月15日)

当面、昨年行った広島市中央公園アイデアコンペの提案作品の中から市民の多くが良いとした案を紹介していく。

- ・最優秀賞作品番号5 (広島市民球場跡地利用市民研究会)
未来への伝言板、球場保存、市民球場記念ホール、被爆電車の展示等の個々のアイデアも然ることながら、平和公園・中央公園及びその周辺に存在する広島の歴史を物語るものとそれに寄り添うように流れる川を一体に捉えて、地に根付いたコンセプトをベースに置いている点が好ましい。
中央公園の地は、江戸時代は広島城の一郭であり、明治になると軍の施設、被爆後は仮設住宅、市民球場、体育館、図書館等の文教施設、そして現在に連なっている。
特に、復興の象徴ともいえる広島市民球場の歴史や思い出をどのような形で継承すべきかしっかりと議論し、市民のコンセンサスを得る努力が必要であることを訴えている点は共感する。



作品番号5より
「広島一歴史と川の道」

受賞者：古池周文氏のコメント

1. あの場所の特殊性と重要性、大きな可能性や役割を理解する。
2. 機能の補完など部分レベルに留まりぶれないよう、市民から生まれた理念等ゆるぎない基軸をたてる。
3. そこから未来へ向けた世界に誇れる素晴らしい場所へ。より高く、より広く、こう願っている。

第2号(平成24年11月15日)

- ・優秀賞作品番号2 (タイトル「Peace Ring Park」)



上：ピースリング
右：マスタープラン



被爆100年後の将来の姿を自由な発想で求めた課題に対して、最も具体的で夢のある提案ではなかったかと思う。実現性を考えると二の足を踏みそうだが、理想像としては、コンセプトも、デザインも群を抜いており、第1次投票では一番人気であった。

丹下平和軸線上にオーバルパーク、ピースリング、グリーンアリーナ(建替え)、スタジアム、国際展示場等を配置し、各施設を人工地盤やペDESTリアンデッキで結ぶ。中国・四国の拠点として、一大メッセコンベンション及びエンターテイメントの地区を形成している。

広島現状を的確にとらえ、進化させるために長期的展望を持って、中央公園の周辺まで含むスケールの大きな提案は、広島を良くしたいという情熱が伝わってくる。

受賞者：堀 弘明氏のコメント

広島は初めて原爆が投下された都市という半面、復興を果たし中国地方の中枢を担う都市という顔を持ちます。恒久平和の聖地として、また大阪福岡間で埋没することのないこの地方の盟主として、広島のみちづくりを考えると、この2点を外すことはできません。

第3号(平成25年1月15日)

・優秀賞作品番号16 (タイトル「TWO LAYER FOREST」)



上：人工地盤上のイメージ
右：地上のイメージ



中央公園全体を一枚の起伏を持った人工地盤で覆い、人と車を分離し、開放的な緑の丘を提案している。既存の文化施設は建替え時期に合わせて低層化・地下化し、人工地盤に統合されて、公園全体が文化を継承する「市民の森」となる。

一枚の人工地盤を浮かせるというアイデアが新鮮で、緑豊かな広場のイメージが好印象を与えたと思う。人工地盤と地上により面積が2倍になるのも魅力だが、果たして地上面が快適な空間になるのか疑問が残る。

広島は地下空間を作るのに不向きと言われているので、人工地盤を適当に組み合わせることはこれからのまちづくりに有効と思う。

受賞者のコメント

受賞者は大手ゼネコンの設計部のためコメントを辞退。

第4号(平成25年3月15日)

・佳作 作品番号30 (タイトル「未来へつづく新たな広島の姿」)



広島平和記念都市建設法をくみ取り、恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、どうあるべきかを真摯に問いかけて提案している。

広島の特徴である水辺空間を活かすこと、



ゾーニング・配置計画

情報・芸術といったメディアを用いて平和を
発信すること、平和だけでなく都市の魅力を一層高めて世界に発振することを謳っている。

具体的には川辺に船着き場・デッキ・河上レストランを、球場跡地に平和音楽堂を、既存文化施設の集約配置等を提案。さらに周辺エリアの公営アパートの用途変更や平和大通りまで提案の対象を広げている。

他県出身の学生がこれほどまでに深く広島のことを考えていることに敬意を表したい。

受賞者：大上泰弘氏（神戸大学大学院学生）のコメント

コンペを振り返ると、まちづくりに対して、様々な分野の有識者の方々や一般市民の方々と交えた議論の必要性・重要性を再認識しました。まちづくりは、単にまちを「更新」していく側面だけではなく、そこに根付いてきた歴史や人々の営みを「継承」していく側面があると思います。そして、世界の原爆の歴史と広島が迎った復興の歴史を決して風化させることなく後世へ継承していくには、時代のニーズに則して単に「更新」されていくのではなく、「継承」すべきものは何かということを明確化していく必要があると思います。そのため今後も、世代や国境を越えて、より多角的な視点から広島を見つめ、将来の姿に反映されることが望まれます。

第5号(平成25年5月15日)

・佳作 作品番号61（タイトル「ひとつながりの街」）



バラバラになっているエリアを一本の道で縫うようにつないでいき、その道に様々な施設を配置して、ひとつながりの街にしていこうというコンセプト。

旧球場跡地エリアには市民広場と市民キャンパスを配置し、中央公園と平和記念公園をつなぐことを意図している。太田川にはみ出した親水空間・レストランや広場を取り込むような図書館・メディアライブラリーなど気持ちの良さそうな空間が提案されている。大変わかりやすいコンセプトとプレゼンテーションが好印象を与えた。中央公園のエリア内で完結するのではなく、周辺までつながっていれば、もっと良かったと思う。



配置計画

受賞者：田中雄基氏（当時名古屋工業大学大学院生）のコメント

広島で育った私は、地元に向けて何か提案ができないかと思い、縁もありアイデアコンペにて自分の想いを伝えることができました。これからも平和で住み良いひろしまのまちを願って、日々設計活動に努めて参りたいと思います。

・審査員特別賞 作品番号12 (タイトル「核廃絶世界平和実現を推進する本拠地」)



やすらぎ川を新たに掘って平和島を作り、そこに国際平和関連施設を誘致しようという奇抜なアイデアが、目を見張るが、根底に核廃絶・世界平和実現を推進するための活動の場、世界交流発信の場にしたいという強い願いが込められている。

実現性は二の次として、このアイデアに込められた広島平和記念都市建設法「恒久平和を誠実に実現しようとする理想の象徴」を具現化した提案として、審査員から高く評価された。



配置計画

受賞者：石原滋氏 (広島市民) のコメント

広島は世界のヒロシマ。人類にとって特別な意味を持った場所。現在、行政が行っている広島市民球場跡地⇨広島市中央公園に対する取り組みに対しては、目先のことだけに捕らわれた飯事にしか思われません。「未来へ向かう志、ビジョン」が伝わってこない。最も大切なヒロシマの理念を何処かに置き忘れてしまっている。理念がないから確りしたコンセプトも立てられない。結果、単なるアイデアの寄せ集めになってしまう。報道等を見る都度、失望で気分が落ち込んでいます。

・審査員特別賞 作品番号23 (タイトル「大らかな風景～森と丘をつくる～」)

現実味のある理想的な提案で、示唆に富むアイデアが散りばめられている。

原爆ドームと平和公園を望める丘を造り、その下に商工会議所等を造り替え、丘から地下広場を経由して原爆ドーム側につなげる。

原爆ドームと平和公園を結ぶ軸線上にモール(緑道)を作り、地中の瞑想空間に結ぶ。旧市民球場跡地は市民が自由に使える自由広場とし、中央公園全体を市民が安全に安心して歩ける歩行者空間でつなぐ。また、公園の北側エリアは都心における世界市民の森を提案している。

この案をそのまま実現できれば、現状よりずいぶん改善されるのではないかと。



受賞者：高橋志保彦氏のコメント

文化遺産である丹下都市軸を尊重します。ヒートアイランド防止からも中央公園は森林浴のできる深い森とします。エリアの歩行者空間の連続性を重んじ、原爆ドームから中央公園に道路を横切らずアンダーパスを計画します。現状は思わしくありません。これは是非実現したいものです。慰霊碑から望むと原爆ドームの脇に高層ビルが見え景観障害です。大きな丘を造り、下に既存施設を内包し、緑と太陽と風の眺望点と「祈りの丘」を形成します。移転した野球場の跡地は市民が集い、平等に、多様に使える緑の広場とします。

第8号(平成25年11月15日)

・作品番号46 (タイトル「今、何もつukらない、という選択肢は？」)

今「何もつukらない」という選択肢はありえるのではないか。この問いかけは挑戦的であった。理想の姿を求めるアイデアコンペに対するアンチテーゼとしての強烈なメッセージとも言える。

今必要なのは現状の公園をもっと「使いこなす」方策を考えることであり、みんなが使いこなせるようになってはじめて公園の未来像が共有できる。

具体的な姿は被爆100年に向けて更なる議論が必要で、みんなが愛情をもって関わるができる公園にしていかなければいけない。

今すぐ誰かが結論を出すのではなく、時間をかけ、段階を踏んで、みんなで考えていこうというプロセスの大事さを訴えている。受賞は逃したが、貴重な提案であり、一考に値する。



提案者：松本成久氏 (設計事務所) のコメント

里山を散策しながら、今歩いている道の成り立ちについて考えることがあります。この道はなぜここに存在するのか？山だったところを必要に応じて木を切り、地面を踏み固め、歩きやすいように整え、丁度よい場所に休憩場が出来て等々。パブリックの原点はこの辺りにあるのではないのでしょうか。みんなの場所をつくるには時間がかかりそうです。先につくってしまうと、簡単に必要性を追い超してしまうかもしれません。今「何もつukらない」ということはネガティブな姿勢なのではなく、一步一步前に進みながら本当に必要なのは何かを考えるということなのです。